

平成 30 年度 第 2 回地域福祉活動計画策定・推進評価委員会 会議録

日 時：平成 30 年 11 月 26 日（月）18：30～20:30

会 場：練馬区役所本庁舎地下多目的会議室

## 1. 事務局長挨拶

忙しいところご出席いただきありがとうございます。本委員会では、第 4 次地域福祉活動計画の中間見直し懇談会の振り返りとネリーズ大交流会 11/17 報告を踏まえ、今後の第 5 次地域福祉活動計画の策定に向けての議論検討をお願いしたい。

## 2. 配布資料確認

## 3. 練馬区地域福祉計画について

区の計画の説明を口頭で行いたい。練馬区の「ずっと住みたいやさしいまちプラン」は、計画期間が 27 年度～31 年度までとなっている。次の計画を、平成 32 年度からスタートできるように計画の検討を進めている。9 月に無作為抽出の区民 3,000 人を対象に区民意識意向調査を実施し、現在は地域活動に携わっている個人や団体を対象に現在を実施している。区民意識意向調査での地域福祉に関する内容は、地域福祉活動の活性化、福祉のまちづくり（ハード）、成年後見制度の利用促進の 3 つのテーマで質問をしている。次期計画は、地域福祉計画とハード面での福祉のまちづくり総合計画の 2 本立ての計画になっている。内容に、成年後見制度利用促進について計画していくため、3 種類の質問をさせていただいた。成年後見制度の利用促進についての調査は個人のみとした。区も計画の推進委員会においてアンケート調査について様々な意見をいただいております、団体の代表が会員の総意を汲み书面回答することは難しいため、高齢者や障害者団体に今後ヒヤリングを行い、その内容を受けてたたき台を作りもんでいきたい。近く、たたき台の骨子を作る予定である。

⇒質問なし

## 4. ネリーズ関係報告 【資料 1】

### (1) ネリーズ大交流会 2018

ジェイコム デイリーニュースの放映

一部「ネリーズってなに？」をテーマにエピソードを交えながらゲストトーク

二部 各地区ネリーズ懇談会報告の後にグループに分かれて意見交換

意見交換の時間が不足していたことが反省点となった。

ネリーズからの感想が多く寄せられた。→報告書参照

企画の段階から、5 人の委員と一緒に検討してきた。参加者からも好評で次回への期待の声が聞かれた。職員も勉強になった。委員のみなさま、ありがとうございました。

### 【ゲストスピーカーより感想】

委員：自身も「ネリーズって何だろう」と思っていたので、良い機会であった。二部での意見交換も活発であり、思いのある人が多い。課題を感じている人もおり、来年に向けて、懇談会から吸い上げていければいい。

副委員長：大交流会という名称で、映像で見るとたくさんいるように見えたが実際の数でも大交流会だった。ひとりの不幸も見逃さない、誰もが安心して暮らせる地域ってなんだろうという気持ちを共有できればいい。つくりっこに通っているメンバー等は、若い時期に病気を発症している人も多いため、自己肯定感が低くなってしまっている。「される側」ではなく「する側」になることを話したが、いろいろな幸せの形があり、それぞれが違うことを大切に、誰もが安心して暮らせることを目指しながら、林田委

員の終わりの言葉にもあったように、「ネリーズアイ」あったかい目があると良いと思った。

委員長：参加したみなさんの話したい思いがあふれていたが、最後にうまく林田委員がまとめてくださった。

委員：ふつうだったら「地域福祉を考える会」とかにするだろうが、「ネリーズ大交流会」としたことが良かった。結論はでないが、「ネリーズは何だろう」と考えることが良かった。着ぐるみも良かった。温かい空気を作っていた。集まった人たちは地域の宝、緻密にプログラムが考えてあってよかった。

## (2) ネリーズかるた

お待たせしているが、年明けには完成予定である。委員やネリーズのみなさんと一緒に、ネリーズの説明をしながらカルタを小学校等に持っていきたい。場内にネリーズかるたの一例を飾っているのを見て欲しい。

委員長：大きなネリーズかるたは、全部はできないのか。体育館等で行ったら面白いと思う。いろいろな利用の仕方があるので、楽しいと思う。

職員：今後、検討していきたい。

## 5. 第 4 次地域福祉活動計画 中間見直し懇談会の振り返り 【資料 2】

第 4 次計画を振り返り、第 5 次計画策定に向け検討するために、中間見直しワーキングチームを構成した。

⇒中間見直し懇談会の内容を資料に基づいて説明

### 【委員からの説明】（3名の策定委員が行ったプレゼンのポイントから）

委員：自分の活動を通して、事例をもとに報告した。なかなか状況が改善されない課題を抱えた子どもたちを地域のリソース、力をつないでいけるのかが課題であった。自分ができることは居場所の提供だが、できることを出来る人が行い、動いて、知ったからには何かをしなくてはという思いで動いているが、生活サポートセンターにつなげながら、相談しながら 継続的となったことでゆとりも生まれてきている。すぐに解決できるものではないが、継続的にコミットしていくことができるようになっていく。社協や地域の人とつながりながらスクラムが組めてきている、

委員：リタイヤして、パワカレに参加したことを機会に、地域のために自分が地域福祉のノウハウを使えるかと悩みがあった。男性は、自分の住んでいる場所は寝るための場所というイメージで地域活動に参加しにくい。町との関わりをどうしたらいいのかというときに男性は厳しい。町会という組織に地域の活動がどのようにリンクしていくか。地元の活動を地域の人と行うことで地元の活動に定着していく。つなげる部分の役割が必要なので、オールラウンドで役割を担う社協が大切である。

委員長：長い社協とのつきあいについて話した。昭和の終わりに埼玉から練馬に引っ越してきたときに、まだ地縁のつながりがないうちに、ボランティアセンターが開催したボランティア講座に参加した。研修委員になって、多くの当事者・生きづらさを抱えた人など多様な人と出会い、価値観や世界観が変化し、ここでの仲間と付き合いが生まれた。この世界が面白いという思いで活動してきた。ボランティアコーナーで相談員を担うことになり、自分も、その時必要と感じた時にボランティアとしても活動してきた。出発点はボランティアセンターだったが、輪が広がり知り合いや相談が増えた。制度について、ともに考え行政と協力できるようになった。社協の理事になった当時、社協はそれぞれの部署が孤立して仕事をしている感じを受けていたが、今は横串になり課題に対して連携して関わるようになっていく。やるべき仕事が増えているが、社協は民間なので 社協としての新しい発想・試み、独自性を持っていくことも重要な役割である。

~~~~~資料 2 「3. 意見を踏まえた気づき」を説明（石山）~~~~~

## 【中間見直し懇談会参加されたゲストスピーカーから】

ゲストスピーカー：社協の活動や役割を知らなかった。以前、知り合いの家族が困難な状況にあったがどこかにつながれるという意識もなかった。制度や役割があることを知らなかった。困難な状況を知ったからには、何とかしなくてはと思ったが、福祉活動に関わっている自分ですえも社協のことを知らなかった。地域にある団体はまだ点であり、点を線で結ぶのが社協とわかった。大きな役割となった。それを知っただけでも自分の安心につながったので、地域の人みんなが安心につながるためには、知ってもらうために何をしていくか。点をつなげる仕組みを一緒に考えていきたい。お願いがある。地域の点をつなげるためには、顔と顔を合わせて信頼関係を築く必要がある。社協からも地域に出て行って、町会等にも顔を出してネリーズも広げて行って欲しい。

ゲストスピーカー：こどもの外遊びの場を行っていて、社協は助成金をもらえるところとの意識であった。生活サポートセンターができた年に、職員がプレパークに足を運んで来て話したがピンと来なかった。どこに相談したら良いかわからなかった時、「一人の不幸も見逃さない」という言葉を覚えていて、ボランティアコーナーに行ってみた。今では、社協に相談してみたらと広報活動をしている。地域ネットワーク懇談会を主催している児童館の館長も知らなかったので、ボランティアコーナーも一緒に参加した。地域住民だからこそできることと専門職だからこそできることの間をつないでくれる。専門職は縦で割れていることが多いので、つなげるところが必要でそれが社協だった。当事者がいろいろな窓口を渡り歩かないといけませんが当事者はできない。12年間見ていた家族のことが気づかなかった。本人たちの学校が福祉につながった。距離が近すぎて話せなかったことを、社協が聴いてくれて良かった。つながったことでコーディネーターは大事だと思った。制度につなぐと、制度は柔軟性がないと感ずることがある。一つの入口から入った問題は、解決してもまた変わって出てくる。柔軟性を持って解決できるのがコーディネーターかと思う。つないだ方がいいことは、遠慮なくつなげていきたい。

~~~~~資料 2 「4. 今後にむけた提案」を説明（石山）~~~~~

委員長：こんなに多くの方が地域で活躍していることに驚く。身近な人を支える人がたくさんいるが、地域で活躍している人たちは、社協のことを知り正しく理解している人ばかりではない。地域で活躍している多くの方をキーパーソンとして、そのキーパーソン、社協職員等の専門職、行政、ネリーズをはじめとする住民が関わって、ネットワークを組みながら協働していけば、地域の課題の解決につながる。そのためには、キーパーソンをもっともっと増やす。ネットワークを広げて、社協の役割を知ってもらう。町会・自治会等へのはたらきかけやつながることが重要である。

## 【各委員から感想・ご意見】

委員：「社会福祉協議会」は一般住民にはピンとこない。自分は、質問に対して、社協は地域の課題に取り組むところと説明した。図書館は本を読むところ、交番は警察がいる…などわかりやすいが、社協のことを、何をしているところか明確にシンプルに説明できないといけぬ。地域の課題に取り組む団体と言えばわかるが、社協が地域の課題にどう取り組んでいるかを住民に力を入れて広報していく必要がある。ネリーズは浸透している地域もあると感じている。あくまでも春日町限定だが、社協は堅苦しく聞こえるので愛称があると良いと思う。

委員：社協の存在は、私が活動しているなかでは大きい。自分が関わっている人たちは、福祉に関係している人が多いので、生活している中で助けてもらえることがたくさんあるので助かる。子どもの就学の問題で社協に行き相談し、一人でも相談に行けるようになった。ネリーズの社協と言われるように、ネリーズがもっと出てくると良い。社協の職員と接していくなかで温かいものを感じている人もいますので期待している。

委員：この委員になり、いろいろな人と知り合うことができた。困っている人たちと対面する活動をしてい

るので、自分たちがパンク状態になる前に相談できる人たちができた。経験的などころを踏まえて専門的な人につなげ、現場とつながって、支援している側と支援される側もされる側とは考えたくはないがいろいろな人がうまく回る循環ができています。今後も必要性がないと、地域づくりや社会が成り立たないと感じる。自分も大変なのに、他の困っている子どもをこども食堂に連れてきたが、支援される側が支援する側になった例があった。社協や行政につないで、子どもが成長するまでつながりを作って行きたい。

委員：パワカレで勉強するようになって社協を知った。自分の場を作ってきたことは幸運であった。町会とあまり関わりができていないが、昨日、町会でボッチャを実施しこういう場は良いと感じた。民生委員の会議で社協も来るが、民生委員も社協と親しくない。もっと宣伝が必要だし具体的に入り込んでいく必要があると思う。是非とも社協から打ち出すよう、ネリーズが起爆剤になればいい。

委員：今までの話を聞くと、社協を身近に感じていなかった人が多いと感じた。社協は知っていたが、わざわざ社協に行かなくてもという思いであった。名前を知っていても内容についてわからないという人は多いと思うので、第 5 次計画には、どのように社協の内容を知ってもらえるか、広報は大事であるし、人に伝えることは大事だと思う。今、点と点でもつなげば広い面となるので次の課題と思う。

委員：練馬区社協は地域住民に支えられている組織とつくづく思った。何が一番良かったかという、地域住民の方たちがそれぞれのことに気づき、活動に展開していくことができている。社協の役割が見えにくいという話だが、様々な構造がある。一つは、時代の状況により社協の役割が変わってきている。社協が個別に関わることは最近のことである。地域の中で団体等の組織化などの流れがあったので、時代によって必要とされる中身が変わってきている。だが、変わらないことは、地域住民の方たちがどう地域に関わっていくかということで、逆に職員の動き方が見えにくいこともある。前面にはでないが、社協としてどう土壌を作ってきたのかを説明できないといけない。4 次で行ってきた成果での柱でもあるが、外に向けてよりわかりやすく社協の役割や機能を知らせる仕掛けが必要で、ネリーズかるたの渡し方などで、きららやういんぐの利用者が関わるなど、見せ方や伝え方を工夫していく。全国的にも注目されるのではないか。数ではない成果の見せ方を工夫するといいい。非常に大切なことは、生活の中ではシビアな福祉課題が深刻になっており、身近な人には知られたくないという思いもある。地域が気づきにくい部分があるので、専門職と地域住民が役割分担しながら整理していく必要がある。

委員：先月、関町ボランティアコーナーから司法修習生が地域の活動、相談情報ひろばの現場を知りたいと紹介されてきた。発達障害や精神障害の方たちの実情を知りたいと実習生や修習生等が地域資源につなげられてきた。そのようなつなげる役割も社協にあり、すばらしい活動である。つなげるという意味ではいろいろの立場の人をいろいろな形でつなげるのが社協と改めて気づいた。私はこれまでの関わりの中で社協の目が入っているので、地域の人に活動しないかと声をかけてしまう。地域には眠っている人材と能力があるので、掘り起こして地域活動につなげていきたいと思うが、仕掛けが必要かと思う。定年退職した人が手続きに行く行政機関等で社協を案内するなど、地域福祉人材の種まきをする必要がある。身近なところで親類が困っていることがあり、住んでいる地域の社協に相談することを薦め地域につながるきっかけになった。また、民生委員・主任児童委員が、地域にひきこもりの方等がいると自ら支援をするなど、とても地域の大変な活動をしてきている。大変な仕事をされていて他にもつながられれば良いと思った。どう有機的につながれるか、横串にさしてネットワークをつくれるかを話し合えればいい。社協職員が聞いているだけではもったいない。近くに寄って個別に話せる機会があれば良い。住民がどう見るかを知る機会があれば良い。

委員：町会の話が出ていますが、私は町会長をしている。町会連合会加入率が 40 パーセント割っている。町会加入の広報に四苦八苦しているが、不動産業界も後押しをしてくれている。メリット・デメリットがどこにあるのか。金銭や物資のことをメリットと考えているのではないか。心の中には触れていないし若い

人はわからないと思う。老後のことを考えると、若い人の負担が大きくなっているので働かなくてはいけない。流れを変えるためには、役所の肩書を活用し、柔軟性を持ち人の中に入っていきことも大切である。町会等の会合では、お酒もひとつのつなぐ手段で潤滑油になる。柔軟性を持って一緒に過ごすことも大切である。誰がつなぐ役割をするのかでは、皆さん方に一役買ってもらいたい。町会ではお祭りはいい。子どもがお祭りを喜ぶ。大人の姿を見せることは大切で、子どもが見ながら建前と本音が大人になってわかる。町会の置かれた状況を話したが、若い人に力を発揮して欲しい。

委員：中間懇談会の報告で「社協の役割」という言葉がいくつか入っていた。社協の役割を言葉にして地域に伝えると違うものになってしまう気がしてしっくりこないなと悶々としている。役割といった瞬間に社協がやることはこういうこと、ということになってしまう。大島の社協に行った時に、土砂災害から 5 年が経ち住民に評価を見直されてきて、「大島社協って何でもする」という住民の発言があった。根幹的なところで社協につなげばなんとなるといって感じがして、「社協の役割」と言葉として固定されてしまうと嫌だなあと感じた。地域住民だからこそできることと、専門職だからこそできることを丁寧にひも解いていかなければいけないと思う。先般のネリーズ大交流会で、「地域福祉する」とか「ネリーズする」とか動詞で表現して話したが、娘が「地域福祉したいけど仕事ではしたくない」と言っており、福祉の仕事というと大変なことをするという印象があるのかという気がする。「専門職だからこそ」という表現にも気をつけていかなければならないと感じている。ネリーズ大交流会ですごく楽しかったのは、林田委員の最後の挨拶の「ネリーズアイ」という言葉を生み出していただいたが、このような共感を生むということが懇談会でできればいい。交流会でも出ていた「若者の巻き込み」が難しい。まだまだ、課題が多い。

委員：行政の立場から、外郭団体をお願いしたいことは、行政ではできない、民間の事業者でもできないことを担ってもらうことに期待している。福祉の現場で、行政でできなくて民間でできないことが何かと考えた時、フットワークの軽さと柔軟性、地域の密着度では役所では難しいところがあり、社協に期待している。区の地域福祉計画と地域福祉活動計画は、表裏一体一緒になって進めていき、地域の福祉を良くしていくことで、目指すところは同じなので、手を携えていきたい。

委員：相談情報ひろばや町会連合会等で、みなさんにはいろいろお世話になっている。社協が何をしているところかわからないという話や、ネリーズは何かかわからないという意見があったと聞いた。私の部署は協働推進課で福祉とは別の部門で、地域のコミュニティの調整、地域の中での協働を行う。区と様々な立場の人たちとの調整で、時代が変化する中で区との関係はどうであるかということを考えている。根底にあるのは、相手によって違うのではないかと。252 町会自治会があるが、それぞれが違う。相手に応じて何を必要としているのかを聞いて話し合っていくことが大切であり、社協のみなさんや区民のみなさんと一緒に行っていきたい。大きな輪を作っていくなかで、区がどのような役割を担っていくのか考えていきたい。グランドデザインを 6 月に出し、みどりの風吹くまちビジョンを 12 月に素案を作る予定であるので、今年度末には計画を完成して新たなステップを踏み出していく。具体的にどのような環境を作っていくかは、個別に現場で会った時に話し合っていければいいと思う。

## 6. まとめ

副委員長：社協が見えないという意見があったが、社協は見えなくていいと前から言っている。区とか社協は全面に出なくて良くて、その恩恵を十分に被っていることがいい。なぜ社協がいいと思ったかは、「住民主体」をうたっているところである。ネットワークをつくる、つながりをつくる、柔軟性、地域との密着度、「誰もが」と言っているところである。地域福祉は「誰もが」の福祉を考えることであり魅力であり、社協に惹かれてつきあってきている。15 年前にきららができる時に反対運動があったが、陳情を出す時に

社協に運営して欲しいと思った。今日は、2 人の心強い社協の応援団ができ、このように増えていくことがいい。地域にとっても当事者にとっても幸せになることが、社協が行うことでいろいろな人との等距離になるのではないかと思っていた。きらは予想していた以上に、地域、商店街とのつながりができている。社協がきらを運営しており、見えていないけど良い働きをしているが、それをどのように見せていくかという、言葉にしてしまうと固くなってしまう。ゲストスピーカーのお二人が「がんがん広報していく」と言っていたが、気づいた人たちが宣伝していく人がたくさん生まれてくればいいと思っている。社協の職員が宣伝していくと良い社協はできない。難しいことが、今日お二人（ゲストスピーカー）が来てくださってことで先が明るくなった。とてもうれしかった。

委員長：来年一年間で、計画をまとめていく。みなさんにご意見をいただきながらまとめていきたいと思う。

## 7. その他

4 次の見直しをしながら、5 次を考えていく。方向性を一緒に考えていきたい。

## 8. 次回の日程について

日時：平成 31 年 2 月を予定 →別途連絡

以 上